

平成30年度 報告書

2019年2月9日(Sat.) → 2月22日(Fri.)

東京大学文学部冬期特別プログラム

Report on the Special Winter Program between the University of Tokyo Faculty of Letters
and the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, February 9-22, 2019



タワー・ブリッジ



目次

1. 巻頭挨拶	
2019 冬の集いに寄せて	
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 大西 克也	2
Foreword to the Winter Program 2019	
Prof Simon Kaner	3
Executive Director and Head, Centre for Archaeology and Heritage	
Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures	
Director, Centre for Japanese Studies	
University of East Anglia, Norwich, UK	
2. ウィンタープログラムの概要	4
3. プログラム実施内容	5
4. 受講者レポート	
① Winter Program 2019 diary	10
② Thematic Report	17
Charlie Kate Mason	[Durham University]
Marianny Aguasvivas-Hernandez	[University of East Anglia]
Katarina Janakova	[Bangor University]
Clare Parry	[Cardiff University]
Jessica Peto	[Cardiff University]
③ 日誌形式レポート	19
④ テーマ別レポート	23
夜久 千華	[文学部 4年]
朽木 亮太	[文学部 4年]
末本 雄祐	[文学部 4年]
築島 愛美	[教養学部 2年]
高野 改	[工学部 3年]
5. 総括	
四度目の交流の冬	
東京大学大学院人文社会系研究科・教授 佐藤 宏之	27

1 巻頭挨拶

2019 冬の集いに寄せて

本学文学部とイギリス・セインズベリー日本藝術研究所との学術交流協定に基づく冬期特別プログラムが始まったのは2016年2月、今年で4回を数える。夏に東京の本郷キャンパスと北海道北見市の北海文化研究常呂実習施設を拠点に行われる夏期特別プログラムとペアとなる形で行われる。どちらも5名の本学学生とイギリス側の学生5名とが、2週間寝食を共にしつつ学ぶもので、冬期プログラムはロンドンとイングランド南西部の史跡等をめぐる前半と、研究所所在地のノリッチ及びノーフォーク州各地を舞台に行われる後半から構成される。双方のバランスを意識した組み立てとなっているが、唯一異なるのは、学生をもたないセインズベリー研究所が募集する学生はイギリスだけではなく、時に海を越えた大陸からも参加することであろう。

年少の頃より古代中国に沈潜することを好んだ私の欧州体験は遅く、貧しい。はじめてヨーロッパの地に足を踏み入れたのは、30歳を超えてからのことである。しかし初体験の印象は鮮烈だった。古代中国語に関するシンポジウムに招かれて訪れたチューリヒの街並みにたちまち魅了された。主催者のロバート・ガスマン教授の計らいで、晚餐の席で披露された子供たちのバ

イオリン演奏はお世辞にも上手とは言えなかったが、生活に根付いた西洋音楽とはこういうものかと感慨深かった。たまたま立ち寄った骨董屋の女主人の気品のある物腰と笑顔は、今でも目に焼き付いている。石畳の街をそぞろ歩きながら、ふと脳裏に浮かんだのは、10数年前にこの風景と出会っていたら、自分は別の道に進んだのではないか、研究者になるなら西欧文化を専攻したのではなかったかということだった。

何かを選ぶことは、実は気づかぬうちに何かを捨てていることなのだ。自らが欲し、手に入れてきたものが多ければ多いほど、捨てていることに気づかぬものだ。しかし一つの選択という行為の背後には、数えきれない偶然と必然とが控えている。それらに導かれながらこの冬期特別プログラムを選択した皆さんの記録がこの冊子である。二週間の濃密な学習体験が凝縮されている。皆さんはこの先、幾つもの新たな選択を繰り返しつつ歩いて行くことだろう。行きつく先は様々だろうが、いつかこの記録を縁に、2019年2月にイギリスで10名が会し、同じ場で学んだ意義を振り返って欲しい。この冊子が一般の目に触れることはそれほど多くはないかもしれないが、しかし皆さんにとってかけがえのない宝になることを願っている。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

大西 克也



Foreword to the Winter Program 2019

The 4th Sainsbury Institute – Faculty of Letters, University of Tokyo Winter Program in British Archaeology and Cultural Heritage was another great success – and we felt that this year the students responded particularly well to the program and developed close bonds over the two weeks they were together. This year the program was also blessed with good weather – indeed the warmest February in the UK on record.

The Summer and Winter Programs, jointly run by the two institutions, are offering a very valuable introduction to cultural heritage in the two countries, along with expert insights into how cultural heritage is conceptualised and managed in Japan and England. At the same time, the programs provide a unique opportunity for students from the University of Tokyo and universities across Europe and elsewhere to spend a fortnight together, sharing experiences and bonding through a common appreciation of the importance of cultural heritage.

I am once again especially grateful to my colleagues at the Sainsbury Institute, Jan

Summerfield, Christopher Hayes and Hannah Stroud for all of their hard work in coordinating the program and accompanying the group. I would also like to thank all the heritage professionals who gave their time to meet the students and explain how cultural heritage is managed in England. Thanks also to the professors and staff from the Faculty of Letters at the University of Tokyo who played such an important role in ensuring the success of the Program.

Exchange through cultural heritage offers wonderful opportunities to enhance mutual intercultural understanding on many levels. I am sure that all of the graduates of these Programs will find themselves in influential positions in whatever career they pursue. It is our heartfelt hope that the memories they acquire during the Programs inspire them to advocate respect for cultural heritage wherever they encounter it. We also hope that they will continue to both make use of and contribute to the network of graduates of the Programs of which they are a part.

Executive Director and
Head, Centre for Archaeology and Heritage
Sainsbury Institute for the Study of Japanese
Arts and Cultures
Director, Centre for Japanese Studies
University of East Anglia, Norwich, UK

Professor Simon Kaner



2 ウィンタープログラムの概要

実施期間	● 2019年2月9日(土)～22日(金) (事前のオンライン講座：2019年1月7日(月)からの5週間で受講)
内容	● 前半：ロンドンおよびイングランド南西部でのプログラム(2月9日～2月15日) <ul style="list-style-type: none">▶ 博物館・美術館等の見学 大英博物館、ナショナル・ギャラリー、ロンドン博物館、ウィルトシャー博物館、アレクサンダー・ケイラー博物館▶ 史跡等の見学 ロンドン塔、ストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡、ローマン・バス遺跡、バース修道院、ミトラス神殿遺跡▶ 歴史的都市の見学 ロンドン、バース 後半：ノリッチおよびノーフォーク州各地でのプログラム(2月16日～22日) <ul style="list-style-type: none">▶ 博物館・美術館等の見学 アプトンハウス、ノリッチ城博物館、セインズベリー視覚芸術センター、リン博物館、ケンブリッジ大学考古学・人類学博物館、ケンブリッジ大学動物学博物館、フィッツウィリアム美術館▶ 史跡等の見学 ノリッチ大聖堂、グレート・ホスピタル、キャッスル・エイカー修道院跡、聖ニコラス礼拝堂(キングズ・リン)、ケスター聖エドモンド教区教会、ケスター遺跡、シーヘンジ(ホルム・ネクスト・ザ・シー)▶ 講義・実習等<ul style="list-style-type: none">・セインズベリー日本藝術研究所での歴史遺産に関する講義・グレッセンホール ファーム アンド ワークハウスでの考古学の体験実習・セットフォード博物館ティーンエイジャー歴史クラブとの文化交流・ノリッチ国際ライティングセンター主催講演会への参加・ケンブリッジ大学考古学研究室の訪問▶ 歴史的都市の見学 ノリッチ、キングズ・リン、ケンブリッジ
担当講師	● ジャン・サマーフィールド(セインズベリー日本藝術研究所 上級研究員) クリス・ヘイズ(イースト・アングリア大学 プロジェクトオフィサー) サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長)
募集方法等	● 2018年11月に東京大学文学部のwebsite等で告知、募集開始 参加申込者に対し書類選考の後、12月に申込者に通知。
受講者	● 東京大学学部前期および後期課程学生5名 セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生5名
支援者 (プログラムに同行)	● 高岸 輝(大学院人文社会系研究科 准教授) ライアン ホームバーグ(大学院人文社会系研究科 特任准教授) 國木田 大(大学院人文社会系研究科 特任助教) 小田嶋輝明(大学院人文社会系研究科 事務部・副事務長) 安食 優子(大学院人文社会系研究科 事務部・図書チーム係長) 山本 総光(大学院人文社会系研究科 事務部・財務・研究支援チーム)

3 プログラム実施内容



ストーンヘンジ遺跡にて

● 事前のオンライン講座

プログラム受講者は全員、セインズベリー日本藝術研究所が準備した事前のオンライン講座を受けた。このオンライン講座は、英国滞在中に学ぶ事柄についての基本知識や用語、また訪問する場所の内容を効率的に学ぶことを目的としており、週ごとに約2時間費やしなが、各人が都合の良い時間にオンラインで受講できる形式をとった。講座は5週間にわたり、すべて英語で行われた。毎週、理解を確認するためのミニテストも行われた。

前半の部

プログラムの前半では、主にロンドンに滞在しながら、同市の歴史文化遺産の多様性の理解に努めた。プログラム初日に受講者は滞在ホテルに現地集合し、その後数日かけてさまざまな博物館・美術館、史跡などを見て回った。初日にはセインズベリー日本藝術研究所センター長のサイモン・ケイナー博士より歓迎の言葉を頂いた。大英博物館では学芸員が応接し



参加者を歓迎するサイモン・ケイナー博士

てくれ、普段は目にするのでできない貴重な遺物を直接手に取りながら学習した。バスを使ってイングランド南西部をめぐる遠足も行った。東京大学からの参加学生は、英国の学生と食事と宿泊を共にしながら交流を進めた。

● 博物館・美術館での見学実習



ロンドンの文化遺産を巡る



大英博物館の見学

3 プログラム実施内容



旧正月で華やかなロンドンのチャイナタウン



大英博物館の学芸員による特別講義



ロンドン博物館の学芸員による展示解説

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であるため、ロンドン滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。大英博物館では収蔵資料に関する講義・実習を行った。学芸員指導のもと、歴史資料（青銅器等）の取扱い方法等を、実物の資料に接しながら学んだ。また、リニューアルされた日本ギャラリーでは、東京大学の学生が英国の学生に展示解説を行った。ロンドン博物館では、ロンドンの歴史遺産について学び、ナショナル・ギャラリーでは、ターナーの風景絵画や、英国絵画史の素養を深めた。また、ディヴァイジーズのウィルトシャー博物館では、ストーンヘンジ等に関連した考古遺物について学んだ。各



エーヴベリー遺跡

博物館・美術館における展示方法は多種多様で、受講者は学芸員との議論を通じて、その意図や方針等をその都度確認し、知見を広げることができた。

● 史跡等の見学

歴史を学ぶ上では、博物館・美術館資料だけではなく、実際の地理的背景との結びつきを考慮することが重要になる。そのような認識に基づき、ロンドン滞在中は、イングランド南西部の歴史文化遺産を訪問する機会を積極的に設定した。ウィルトシャー州に所在する世界的に著名なストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡を訪問し、新石器時代の文化や生業、ランドスケープ等について学んだ。また、これらの史跡では、訪問者



ウィルトシャー博物館館長から展示物について説明を受ける



ストーンヘンジ遺跡での学芸員による解説

へのアプローチ方法や展示物の構成等の違いについても議論を行い、理解を深めた。この他に、サマセット州バースを訪問し、ローマン・バス遺跡やバース修道院の歴史文化遺産を見学した。ロンドンでは、ロンドン塔、ミトラス神殿遺跡等を訪問し、英国の歴史について理解を深めた。受講者間では毎晩、訪れた博物館・美術館や史跡について議論を交わし、歴史文化遺産の意義を考える機会を持った。



バース修道院

後半の部

プログラムの後半では、拠点をノリッチに移して、ノーフォーク州の歴史文化遺産について学習した。後半初日にはセインズベリー日本藝術研究所を訪問した。その後、州都ノリッチを含めたノーフォーク州の歴史的環境を現地訪問しながら学んだ。セインズベリー日本藝術研究所では歴史遺産に関する講義の受講や、グループ討論によるレポートの作成も行った。受講者たちは、前半の部で感じた意見等を発表し、交流を深めた。議論の内容は、博物館の学術的・社会的役割の違いや、文化遺産の歴史的価値や背景、展示・解説方法等、多岐にわたっていた。ノリッチ滞在中も、東京大学からの参加学生は英国の学生と食事と宿泊を共にしながら親交を深めた。

● 博物館・美術館での見学実習

プログラム後半では、ノリッチ近隣の博物館・美術館を積極的に訪問した。ノリッチ城博物館では、ノーフォーク州の歴史と自然に関して学んだ。また、企画展「Viking rediscover the legend」を観覧し、ヴァイキングの歴史についても学んだ。イースト・アングリア大学のセインズベリー視覚芸術センターを訪問した際には、世界的に収集されたコレクションや、英国の芸術家エリザベス・フリックの企画展を鑑賞した。日本



セインズベリー日本藝術研究所にて、サイモン・ケイナー先生から歓迎の挨拶



ノリッチの街について学ぶ参加者たち



リン博物館にて

3 プログラム実施内容

の芸術作品の観覧の際には、東京大学の参加学生が縄文時代の土偶に関して説明を行う一幕もあった。ケンブリッジでは、ケンブリッジ大学考古学・人類学博物館、ケンブリッジ大学動物学博物館、フィッツウィリアム美術館を見学した。

● 史跡等の見学

ノリッチ滞在中は、近隣地域の歴史文化遺産等をバスで巡った。訪問した史跡は、ノリッチ大聖堂、グレート・ホスピタル、キャッスル・エイカー修道院跡、キングズ・リンの聖ニコラス礼拝堂、ケスター遺跡、ケスター聖エドモンド教区教会、ホルム・ネクスト・ザ・シーに所在するシーヘンジ等である。今年度は、中世の聖堂や教会を見学する機会が多く、歴史文化遺産における宗教や建築分野に関する知見を多く得た。シーヘンジの見学では、学芸員の案内のもと、地形や植生を観察しながら海岸まで徒歩で移動し、青銅器時代の人々の暮らしぶりに思いを馳せた。また、バスからノリッチの移動途中に立ち寄ったアプトンハウスでは、芸術コレクションや庭園を見学し、戦前の英国の生活について理解を深めた。

● 歴史文化遺産の講義

ノリッチやキングズ・リンでは、担当講師の方から直接解説を伺い、体感的に歴史文化遺産を学んだ。歴史文化遺産は、調査・報告だけではなく、その後の保存や活用も重要になる。リン博物館やケンブリッジ大学考古学・人類学博物館では、展示の解説とあわせて収蔵庫も訪れ、収蔵品の保管状況等も見学実習した。保管されている資料を間近で観察することでより理解を深めることができ、貴重な機会となった。また、ケンブリッジ大学では考古学研究室を訪問し、考古学における食性分析、環境考古学、ジオアーケオロジー、文化財保護

に関する最新の研究成果を学習することができた。

● 歴史文化遺産に関する体験実習

歴史遺産を知るためには、実際の活動体験を通して学ぶことが効果的である。グレッセンホール ファーム アンド ワークハウスでは、旧石器時代や新石器時代に使われた槍、投槍器、弓矢等の道具の製作方法を学び、実際に使用する体験実習もおこなった。担当講師の指導のもと、どのようにすれば効率的に道具を製作、使用できるのか説明を受けた。考古学の活動に初めて参加する学生も多く、歴史遺産を体感する貴重な経験となった。また、リン博物館では、青銅器時代のモニュメントであるシーヘンジを来館者にどのように解説するか議論した。その一環として、お菓子でモニュメントを製作する実習を行い、ハンズオン展示の有効性を体感することができた。

● 交流イベントへの参加

プログラム期間中には歴史文化遺産に関するイベントへ参加する機会もあった。グレッセンホール ファーム アンド ワークハウスでは、セットフォード博物館ティーンエイジャー歴史クラブと交流する機会があった。日本と英国の文化交流のよい機会となり、その土地の歴史文化がどのように継承されているのか実感できた。また、同歴史クラブによるワークハウスとLGBTQに関する展示解説も行われた。この他に、プログラム期間中にノリッチ国際ライティングセンター主催の講演会にも参加する機会があった。日本で直木賞に選出された中島京子さんの『小さいうち』の翻訳出版記念イベントであり、大勢の方が参加していた。日本文化に関する海外の関心の高さを知ることができ、有意義な時間を過ごすことができた。



グレッセンホールファーム アンド ワークハウスにて。ティーンエイジャー歴史クラブと

前半の部



後半の部



4 受講者レポート ①

■ Winter Program 2019 Diary

Charlie Kate Mason, Marianny Aguasvivas-Hernandez, Katarina Janakova, Clare Parry, Jessica Peto

Day 1, Saturday 9th February

We all met at 13:00 at the Royal National Hotel in London. You could tell it was the first day because we were all very shy and quiet at the beginning, but slowly we started to open up and get to know each other. We had sandwiches for lunch and then headed to the British Museum where we were put in pairs in order to discover the museum more efficiently. Chris prepared different routes for each group so it felt like a treasure hunt which was very entertaining. Manami and I did not manage to see all the items in our list, however we were happy we got to appreciate such a broad part of the museum in such little time and are excited to go back on Monday. Although my favourite object in the museum will always be the Hoa Hakananai'a, I was very interested in the Royal Game of Ur and would like to research more about how the game works. We all reunited again at 16:45 and headed back to the hotel to check in. Afterwards, we all headed to the North Sea Fish restaurant where we had fish and chips. Before ending the day Jan and Chris gave us our welcome bags with the whole program and gave us instructions for the rest of the journey.

(Marianny Aguasvivas-Hernandez)

Day 2, Sunday 10th February

Our second day of the Winter Program began with an early breakfast, where we successfully avoided a "rush hour" so we could have enough time to enjoy our food. Our journey continued with a walking tour around central London, with stops and short commentaries for each place worth mentioning on our way. Because we are staying in a hotel in central London, we have

the great advantage that all the important and interesting places in the city are within a short walking distance (around 30 minute-long walk). Our first mini stop was in front of the British museum, which we had already visited yesterday. Thanks to the early arrival, we managed to get something rare – photos of the museum with hardly any people in. After that we crossed through the Seven Dials and its iconic triangular plots which were built in order to maximise the frontage of the houses with a column situated in the centre of the street where all the seven roads around converge. Chinatown was waiting for us next, with its red decoration and preparations for today's celebrations of Chinese New Year. We used this amazing scenery for a group photo! The first of the many. Our next stop was one of the most famous places in London – Piccadilly Circus, which is featured in many films and shows, such as Sherlock series. Somehow we managed to come across the Kingsman shop next (yes, we mean THE Kingsman, as a famous British trilogy, with the third film coming soon). It was quite thematic, as the Buckingham Palace was only few streets away. There were people gathering in front



初日のランチで自己紹介

of the palace for the changing of the guards, as it was nearing to that time. We took a few pictures and continued with our journey, because it was too busy and we had yet much in front of us. But as we were passing by, we caught a glimpse of the guards performing some music and their march towards the palace. Our first slight change of plans came when we unfortunately missed our Thames cruise by only few minutes. Thanks to this we had lunch a bit earlier as planned, which gave us a welcome break from the morning's walking. With our batteries fully-charged, we entered the Tower of London where we had more than two hours to look at the most interesting parts of this former medieval fortress, which served as a prison until the middle of the 20th century. With the crown jewels, torture room, the White Tower and ravens, we managed to see almost every part of the Tower. After the tour of the Tower we had a Thames cruise back, where we enjoyed both the stunning sunset over London and the chance of letting our tired feet rest a little. With the cruise we finished our Sunday activities and took a tube to get back to our hotel, but because there were celebrations in Chinatown, some lines, especially the one we took back, were some of the busiest. Thanks to this we could experience a bit of a Tokyo-style underground and its typical fully-packed trains. Back at the hotel we had a light dinner after which some of us went back to the Chinatown to enjoy some of the celebrations.

(Katarina Janakova)

Day 3, Monday 11th February

Today we returned to the British Museum, my favourite place in London (along with Cleopatra's Needle). The day began with an introduction to the history of the British Museum by Jan Summerfield, followed by several gallery tours. While in the Prehistory gallery, it was fascinating to compare the ceramics from Bronze Age Britain to their contemporaries from Jōmon Japan. The

group then ventured to the Japan gallery, where we were given a short lecture on a Japanese painting, the Bodhisattva Benzarten, by Professor Akira Takagishi. I really enjoyed these sessions, as I had the chance to explore subjects not covered in my current university modules.

Afterwards, we headed back to the Great Court where we had the fantastic opportunity to go behind the scenes. The session was led by Neil Wilkin, a curator at the British Museum. The group was able to handle some Bronze Age objects, including a rare golden necklace piece (bullae), found in Shropshire. Other finds included an axe, which was found as part of a hoard deposit; it stood out to me as the axe had contained a flower, reminding us of the selective nature of the archaeological record. Once the session was over, we were allowed into the staff canteen to have lunch, which was an unforgettable experience for us all.

Still in awe of that morning's activities, we made our way to the National Gallery, where we were split into pairs to explore the vast collections of artwork. For me, viewing the Wilton Diptych was a highlight, as I have learnt about this piece in lectures and I could finally see it in person. By the end of the day we were all very tired, but all the walking was worth it! In the evening, the group ate at Las Iguanas, discussing our favourite moments and reflecting on the fantastic opportunities that the day had offered.

(Charlie Kate Mason)



大英博物館グレートコートでのイントロダクション

4 受講者レポート ①

Day 4, Tuesday 12th February

After having breakfast, we walked all the way to the Museum of London which was actually very nice because we passed by very interesting buildings, like the old street reconstructed after the fire of London and some interesting pubs. In the Museum of London, we met Roy Stephenson, the Head of Archaeological collections who was very nice and gave us a tour of the Museum. It was interesting because it was not a casual visitor tour but a more tailored tour that explained about the way the exhibition was planned and what their objectives were. This helped us get an insight into the pros and cons of the way an exhibition is displayed and the constraints a museum has due to budget or space. After the tour we had a bit of free time to walk around the museum. I went back to the Victorian streets and the Pleasure Garden because they were the parts that interested me the most. After the museum we all went to eat at Pret A Manger, and after that we had free time in London for the afternoon. I went to the Tate Modern, but I know most of the other students went to museums too; it seems we never get tired of those. We met back in the hotel to walk to Giraffe where we had gyoza and burgers for dinner.

(Marianny Aguasvivas-Hernandez)

Day 5, Wednesday 13th February

Today we visited Stonehenge; I was struck by the sheer enormity of the monument - I



ロンドン博物館に展示されているミトラス神殿の遺物

don't have the words to describe how impressive it was. As someone from the local area it was amazing to learn about the pre-history of Wiltshire from Stonehenge, Avebury and Wiltshire Museum. I have visited Avebury in the past and it was lovely to re-visit it and see how the site has adapted and changed to better suit the tourist community visiting the area, allowing more of its history to be learned. It is a shame there was not as much information about St James Church in Avebury and the visitors centre at Stonehenge has the ability to have much more displayed to complement the visit to the site. David Dawson gave us an 'after hours' tour of Wiltshire Museum which was so enlightening and raised many big questions about the history of the area such as why were bones reused, where did they come from and where did they go after? It was an incredibly thought-provoking day and filled with interesting and exciting information. The highlight was definitely seeing the Stonehenge model at the Wiltshire Museum and seeing the use of coloured glass to represent the rising and setting sun on the solstice. It was a wonderful day and I loved every moment of it. Thank you to all the tour guides today - Martin Allfrey and David Dawson - you were incredible!

(Clare Parry)

Day 6, Thursday 14th February

Day 6 of the Winter Program brought us to the town of Bath. We started with a visit to Bath Abbey and I found it breath-taking to see the magnificent interior of the Abbey and learn more about the Footprint project currently taking place. Next was the Roman Baths, even having visited the Baths before it is still just as amazing on every visit. The experience was immersive, although sadly that immersion couldn't extend to the hot spring waters - it did look inviting in there! The sunny afternoon was spent with Mike James as our guide on a walking tour, I

greatly enjoyed the tour and found it both insightful and entertaining as there was a delicate balance of expert knowledge and comedy stories. Overall, day 6 has proven to be a day filled to the brim with new and interesting knowledge about all manner of topics - archaeology, architecture, literature to name but a few. I found it particularly interesting to learn about the architecture of The Circus and how many styles have been placed together in a single structure, as well as using Stonehenge as the inspiration for the layout. Having not previously studied Architecture, it was great to be able to learn something new!

(Jessica Peto)

Day 7, Friday 15th February

Today we embarked on the long journey to Norwich (think of it like our version of the Fellowship of the Ring travelling across Middle Earth)! On our way through the beautiful English countryside we stopped off for a few hours with the wonderful National Trust at Upton House. The gardens were stunning and it was interesting to see how they are pretty much how Kitty Lloyd Jones created them in the 20th century. The house itself was just as beautiful and the artwork was incredible (thank you to Geoff Bell for the introduction to the house and Clive Nightengale for his art knowledge. I really loved talking about the Dyrham Triptych and the French miniatures. The Triptych was interesting because of the thinned out paint



アプトンハウスにて

on the faces, we think it had been badly cleaned in the past as you could see through to the layers of paint beneath or the artist's sketches (1 woman had 4 eyes, a man had 2 noses and you could see a column through another face). The French miniatures were also wonderful as you could see the parchment they had been painted on with the original writing of the parchment on the back. As an ancient historian, I also enjoyed seeing the Chelsea porcelains of Apollo and the Nine Muses – the take on their style and the representations of what they were the goddesses of was intriguing to compare to other representations of the muses both from Ancient Greece and more 'modern' art. My favourite part was when Yusuke was telling Jan, Charlie, Jess and I about the Japanese art hanging in the master bedroom – it was wonderful to understand it in a way we couldn't without Yusuke explaining the story, artist's marks and style.

(Clare Parry)

Day 8, Saturday 16th February

Today was our first full day in East Anglia and we headed to Caistor Roman Town and the Sainsbury Institute. Despite the cold and not being able to see much, I really enjoyed Caistor because it was interesting to imagine what it was like to be a Roman there. It was very interesting to see the walls and different styles of building walls. Marianny also found an iron nail which was cool! We then went to Avengers HQ, I mean the Sainsbury Centre for Visual Arts (designed by Norman Foster), to see the Elisabeth Frink exhibition as well as the permanent exhibition. It was interesting to see the Frink exhibition, however I struggle to understand art like that – my favourite was the Green Man because of the message of hope behind it. My favourite part was when the Japanese students told us about the dogu statues – it was amazing! We had a quick stop off at the Sainsbury Institute and saw the incredible

4 受講者レポート ①

library! We then had free time and we all went and bought food for tomorrow night - we're having a foodie night!

(Clare Parry)

Day 9, Sunday 17th February

On Sunday we woke up to very nice weather, and after having a super filling breakfast we all headed to Castle Acre priory. It was a beautiful site. We first walked around the town on our way to the manor. It was amazing how you could see all the details of the walled town, and the signs of where the buildings had been. Jan gave us our own private tour of the place as she had worked there before, which was perfect as she was able to answer all of our questions about the dynamic of the place and the techniques used for building and using flint. The site was a Priory on the way to an important pilgrimage site during the eleventh century. Jan explained the evolution of the site and its three big stages. Afterwards we walked up to the priory which was one of the most beautiful sites we visited. We learned not only about the story of the silent monks and William de Warenne, but also details about this specific site, it felt like a dream and was the most picture worthy place. After wandering in paradise we took the coach to Wells-Next-The-Sea, where we had a wonderful Sunday roast and pudding. We got some free time and went to see the sea - the weather was so wonderful so the town was full of dogs which made us all VERY HAPPY.



土偶について英語で説明に挑戦

We saw crab fishing, and we showed the Japanese students the arcade. Charlie found a lot of ceramics in the beach. On our way back to Norwich we took the coast to see the seaside and stopped a few times to admire the landscape and take pictures. After the coach dropped us all in the hotel we headed to Chris' accommodation where we all took different snacks and sweets from our countries and had the most amazing dinner party. We got to listen to typical music and see traditional dances (all improvised by staff and students), had a candy overdose. When we came back to the hotel we played charades before going to sleep. This was definitely one of my favourite days in the program.

(Marianny Aguasvivas-Hernandez)

Day 10, Monday 18th February

Report writing day

Day 11, Tuesday 19th February

Day 11 started with a trip to the Kings Lynn Museum store, it was fantastic to see the behind the scenes of the museum and just how many objects it actually has in its possession! It was very well organised and we even got a preview of the objects to be featured in an upcoming exhibition on journeys. I really liked hearing the ways objects were being used to demonstrate different interpretations of journeys. Next we had a walking tour of Kings Lynn by Oliver Bone, with the chance to see the church and



エイカー城下を臨む

it's beautifully preserved angel roof. The afternoon was spent at the museum getting a taste of the brilliant school activities offered by Melissa Hawker, making 'cake henge' and learning about the conservation of Seahenge. I love the idea of the children being engaged by the activities and wanting to return to the museum and appreciate heritage. My favourite activity was the recreation of Seahenge out of chocolate fingers and cake. To finish the day we embarked on a walk with Monica and Sophie, who showed us the site where Seahenge was discovered, it was a relaxing way to finish a great day.

(Jessica Peto)

Day 12, Wednesday 20th February

After a few days of early mornings and long travelling, we had a chance to have a bit longer sleep on Wednesday morning when we took a coach to Gressenhall, which was used as a workhouse as well as a farm. We were met with Jan Pitman, who was kind enough to give us a quick tour around the Gressenhall's collection store. This particular tour was a bit different to the ones we had had before in the program. Our amazing tour guide's enthusiastic and interesting presentation of the collection pulled us into the story of the workhouse with funny and



お菓子を使ったモニュメント作成に挑戦

easy to understand small "re-enactment" of how it used to work there. We learnt not only that, but also who was let in, how the life in the workhouse looked like – it was made to be difficult and harsh in order to distinguish who deserved a place within the walls. After that we went back in time to the prehistoric times where we could see the collection of the oldest known artefacts from the Norfolk area. After a quick look around, Jan brought us some Neolithic objects and we did some object handling. We even tried to polish an axe head! Because we were such a good group we were led outside to do some prehistoric hunting. A "pig" (made from wood and leather) waited for us hunters in the woods, where we tried replicas of weapons (a spear and a bow). After everyone's turn and two successful shots we all agreed that we would make amazing hunters. We had lunch in a beautiful building with a glass roof after our session, accompanied by the Teenage History Club who later gave us an amazing LGBTQ+ tour around the workhouse. They had only two hours to prepare it and they smashed it! Then we were given maps and were sent on a mission to collect all eight stamps, which were waiting in the workhouse's farm. We were able to see many different animals, such as horses and curious cows, which came to us to see what was going on in their home. Later in the store, this year's trainee Laura Reeves showed us around, where we were able to see the biggest preserved steppe mammoth skeleton



歴史クラブによるLGBTQ+ツアーにも参加

4 受講者レポート ①

in Britain. An incredible 85% of the whole skeleton was found and brought to the store with only the skull missing, which was probable eaten by hyenas. But the best part was that we were allowed to touch it! After we came back to Norwich and had a little break/nap, we took off towards Dragon Hall for a very interesting talk about Kyoko Nakajima's book *The Little House*. We then had a late dinner in the Library – a restaurant in the heart of the town and in the old library.

(Katarina Janakova)

Day 13, Thursday 21st February

For the final day of the Winter Program the group visited Cambridge. In the morning we visited the Fitzwilliam Museum, where we met with Daniel Pett for a tour of the galleries. This provided us with a fabulous opportunity to learn about the museum's history, which was followed by a talk on how digital mediums are being used in order to enhance the visitors' experience. Afterwards, we had some free time in the museum to explore our favourite sections; I spent most of my time studying the Amarna collections. Once the visit was over, we had lunch in the Museum of Zoology.

In the afternoon we ventured into the centre of Cambridge to explore the area and its variety of architectural styles. This was followed by a tour of the Department of Archaeology, which provided us with a great

insight into their current projects and possible routes for future study. For the last activity of the day the group met Jody Joy, the European Curator at the museum, who gave us a fascinating tour of the Museum of Archaeology and Anthropology. We were taken around the Star Carr exhibition and introduced to the displays, which included a mix of experimental and sensory elements. The tour also took us to the museum stores, which enabled the group to compare the impact of funding upon museums, through comparing the store to those we had visited at King's Lynn and Gressenhall. Prior to the program I had not been inside a store, so this experience was very valuable to me.

The past two weeks have given the group so many unbelievable opportunities to explore British heritage and archaeology like never before. The experiences we have had as a group have given us a unique perspective; the exchange of ideas and traditions making the program unforgettable, whilst also prompting my own interest in Japanese culture. It will be hard to say goodbye to everyone, as the group has definitely become close – friendship bracelets and all. I can honestly say that I have made friends for life; I would highly recommend the program to anyone thinking of applying!

I would like to say a huge thank you to everyone who made this program happen.
ありがとうございます

(Charlie Kate Mason)



ケンブリッジ大学にて



ケンブリッジ大学では研究室や博物館を見学した

■ Thematic Report

Charlie Kate Mason, Marianny Aguasvivas-Hernandez, Katarina Janakova, Clare Parry, Jessica Peto

Essay: 'Which heritage attraction had the clearest interpretation for the general visitor and does money play a part in how well the story is told?'

Introduction

The best immersive and informative experience of a heritage site during the Winter Program has been the Roman Baths, which presented information through various media, allowing the general visitor to interpret the site. Throughout the program we have seen how the visitor's experience can be affected by funding.

Visitor Engagement and Effective Exposition

Visitor engagement is influenced by the site's ability to capture their attention, thus encouraging their willingness to learn. The Roman Baths present the information in a wide range of ways including: projection, multiple audio guides, models, re-enactment, simple plaques and video reconstruction. The use of projection and re-enactment aids the visitor's immersion in the site by transporting them to the era - this is enhanced through the child audio guide creating characters from Roman Britain. Immersion reached its height through the use of video



ローマン・バス遺跡のガイドは、パンフレットや掲示・音声ガイド等さまざま

reconstruction and projection – building a picture on top of the ruins and attracting people with no prior knowledge of the site. By using these, the public understand it immediately and thus if they miss the plaques then they can still easily understand the site and what is going on. This is aided through the baths being kept open - allowing the visitor to see it how it was. There are also interactive displays such as the pulley system and copies of the archaeology that you could touch, thus allowing the site to transport the visitor to the era. This also helps people with visual impairments, widening the possible audience for the site. The Baths have received a substantial amount funding for their displays with projects currently underway to further enhance the visitor experience. At this site, the funding has enabled the Baths to wholly invest in the visitor experience, thus making it accessible to the general visitor and easy to interpret.

Creating an Informative Experience

Information is vital to a heritage site – the Baths have this in abundance and it is readily



遺跡の近くには現在のバス施設がある

4 受講者レポート ②

available through audio guides and written plaques. These audio guides are easy to use and universal, through the use of numbers to start the guide. This is useful for people of all languages and also for people with visual impairments. The funding helped the site to pay for the audio guides themselves (as well as their upkeep), pay the actors, create them in different languages and create the plaques. Each artefact has its own visual information and this is easy to match up with the object, unlike the Victorian street with the Museum of London.

The Impact of Funding on Immersion and Informative Experience: Comparing the Roman Baths with Other Attractions

Although money is not the only thing to aid a site, we can see the difference money can make in site interpretation – for example Avebury lacked information and no one understands what it is/could be. Wiltshire Museum have got a similar immersive and informative approach to Bath but due to lack of funding, they are unable to achieve the same level of immersion and information – this is hoped to be rectified by an upcoming move to a bigger site. Bath has a large

activity trail and Wiltshire Museum also had a large number of activities, such as object handling and an excavation sand pit. Funding does effect the site, however it is what they do with what they have and how effectively they use their funding. For example, Wiltshire Museum and Bath maximise their funding, illustrating how money does not have to effect the interpretation of sites, if it is used effectively as Wiltshire Museum and Bath both present their information in an impressive way.

Conclusion

Overall, the Roman Baths have the clearest interpretation for general visitors due to the amount of funding, allowing the story to be told in a highly effective manner.

Accessibility is prioritised at the site, providing an inclusive learning environment. All learning styles are catered for at the Roman Baths, thus the use of information allows for a clear interpretation. However, the site is expensive and its location in the centre of Bath (thus surrounded by buskers and cars) takes away from the complete immersion in Roman Britain and the context of the landscape with the archaeology.



トラファルガー広場にて

■ 日誌形式レポート

夜久千華、朽木亮太、末本雄祐、築島愛美、高野改

1日目—2月9日(土)

参加者の多くが前日入りしている中で当日入りを選択したことで、ロンドン地下鉄名物の週末運休の煽りを受け、初日から遅刻する醜態をさらしたが、参加者みんなが優しくかったこともあり、あっさり受け入れてもらった。荷物をホテルに預けてからランチに移行し、サンドウィッチを手軽に食べた後、大英博物館に移動。館内外に特別展を紹介するポスターがあったが、5月から始まる漫画に関する次期特別展のポスターに使われている一枚絵が、ゴールデンカムイのアシリバだったのは意外で、夏に網走監獄へ行ったときのことを思い出した。その後、あらかじめクリスがピックアップした展示品巡りを、その場で組んだパートナーと一緒に、また時には違うペアと共に行うも、時間不足で完遂できなかった。しかしジャンによると、月曜日に再度大英博物館に訪れるとのことなので、見ることはできなかった部分も含めてリベンジしたい。日本ギャラリーにある展示品をパートナーに英語で解説するのは、とても苦勞した。しかし、焼き物について説明する際には、以前に九州を訪れた際に立ち寄った伊万里や有田の工房で教えてもらったことが助けになった。夕食はフィッシュアンドチップスだったが、日本で食べたものと比べても遜色ないものであり、安心した。今後も続くことを祈りたい。

2日目—2月10日(日)

ロンドンを周回した一日。とにかく歩きまわる。まずはブンダイアルズへ行き、チャイナタウンを經由してピカデリーサーカスへ向かった。それからロイヤルアカデミーとセントジェームズスクエアガーデンにも立ち寄ったが、日曜日で閉鎖されていて、外部からのみの見学となったのは残念。だが、日本とイギリスでの休日の違いを感じるきっかけにもなった。

次にバッキンガム宮殿に向かった。ちょうど衛兵の交代式を行っていたので、騎兵隊と歩兵隊の雄姿を見ることができた。その後、チャーチル戦時執務室を通過し、ビッグベンとイギリス国会議事堂に到達した。ビッグベンが工事中で、時計の部分しか見えない今だけの光景が新鮮に思えた。

ここまで順調だったが、問題が発生した。乗り場にたどり着くまで時間が予想以上にかかったことでテムズ川クルーズの船に乗り遅れてしまい、その確認でさらに時間をロスしてしまったため、急遽地下鉄を利用して移動することになった。慌ただしく移動して昼食をとったあと、午後からはロンドン塔を訪問する。ロンドン塔は王室との関係性や牢獄として使用されていたことが有名だが、武器庫としての役割を示す展示が意外と多かった。塔内に衛兵がいたことや、武器や勲章をはじめとした軍事関連分野を専門とした展示館があったことにも驚いた。ロンドン塔はテムズ川沿いにあるのだが、すぐ外には第二次世界大戦の武勲艦であるベルファスト号が艦そのものを博物館とするかたちで停留しており、ロンドン塔を含めたエリア全体で時代の流れを感じた。

ロンドン塔の訪問を終えると、テムズ川クルーズに乗船した。穏やかなテムズ川を進むということで、船は安定していて、船酔いせずに景色を楽しむことができた。また、乗っていた時間帯は晴れていて夕焼けを望みながらのクルーズとなったこともあって、ロンドンアイを筆頭に、各名所の光景が映えるものになったのは僥倖といえるだろう。

夕食後に再度、学生有志で外出。レスタースクエアの劇場街へ向かい、チャイナタウンを經由し、翌日訪問する予定のナショナルギャラリーの場所を下調べもかねて、トラファルガー広場に行った。深夜ではあったが人も車も多く、大都会ロンドンの一端を垣間見た気がした。この散策中に見た劇場街での映画館の宣伝作品に「カメラを止めるな」や日本の漫画が原作の「アリータ」があったことから、イギリスにて日本の文化について考える機会を得た。昨日は大英博物館の日本ギャラリーで展示品を通して日本文化の説明を見聞きし、明日も日本ギャラリーに行くので、考えを深める良い機会かもしれない。

3日目—2月11日(月)

ホテルで注意されるまであまり理解していなかったが、ブレックファストはコンチネンタルスタイルだと冷食だけで、イングリッシュスタイルになると温食が追加されるようだ。この後のホテルでも気をつける必要があるかもしれない。

午前中はロンドン塔にて、キュレーターの人に展示品解説をしてもらいながら、イギリスの考古学の説明を受ける。ランチは職員食堂を利用させてもらったが、その際に日本人スタッフに遭遇して話す機会があった。その方が若いうちから異国の大英博物館でスタッフとして働いている熱意に感銘を受けた。

午後はナショナルギャラリーに移動し、初日の大英博物館の時と同様、クリスのピックアップに沿って新たなパートナーと館内を巡回。指定された作品が指示と違う場所にあったり、そもそもなかったりして、初日以上に苦戦。しかし、パートナーが積極的に職員に質問してくれたおかげで完了できて、感謝しきりであった。また、館内では作品のスケッチをしている人がいたことも興味深かった。日本で見られない光景だったので、不思議な気分になった。

夕食時には、多忙なサイモン所長がいらっしやった。席が近かったこともあり、いろいろ話したが、日本での勤務経験も豊富にあって日本語が非常に流暢で、かつ英語も聞き取りやすく話してくれたので、緊張せずに楽しく会話することができた。

4日目—2月12日(火)

午前中、王立裁判所やテンプル教会を通過しながらロンドン博物館を目指す。ロンドンの先史時代から近現代までを幅広く網羅する博物館で、住居の跡地から化石や生活用品に至るまで様々なものを展示している。一見まとまりがないように見えるものを統一感を持って展示できているのは、構想をしっかり行った証であろう。展示品の中にはガスマスクや爆弾の破片

4 受講者レポート ③

といった生々しいものもあるが、過度に生々しさを感じさせないのも配置の妙といえる。

昼食をとり、ミトラ教神殿の遺跡へ移動する。遺跡があったことは20世紀から知られていたが、本格的な発掘は21世紀になってから行われたらしい。ブルームバーグがヨーロッパ支局を創設する際に発掘調査が行われたという経緯もあり、遺跡の見せる施設は新しく、かなり意欲的な作りになっている。タブレットによる出土品の解説やプロジェクションマッピングを利用した遺跡展示がなされているが、ミトラ教自体には不明な説明も多く、よくわからない部分もあった。

その後、夕方まで自由時間となり、各自が行きたいところに行ったが、自分は二日目に外観しか見るができなかったベルファスト号に見に行くことにした。ベルファスト号は第二次世界大戦直前期に建造された条約型のタウン級軽巡洋艦で、日本では最上型、アメリカではブルックリン級に相当する。これらの中型艦は日本では軒並み戦没しており、またアメリカだとスクラップになるか他国に譲渡されていて、博物館として保存される大型艦と違って現存しないものがほとんどである。その意味で、ベルファスト号は今日まで残っている稀有な例であり、希少性が高いと言える。艦内では、艦砲射撃の音や衝撃を砲塔内で再現しており、中型艦だからこそ感じるこのことのできる迫力を実感できた。

最後に、夕食後にキングスクロス駅に向かい、ハリーポッターのアンテナショップで買い物を楽しみ、映画本編中のシーンを再現した場所での写真撮影も行った。撮影は遅い時間帯になったが、それでも長蛇の列になっていた。買い物も楽しみたい人は、撮影がスムーズに進めるように訴えていたが、怒るのではなく冗談めかして言うことで、和やかな雰囲気が保たれており、和気あいあいとした環境で撮影できたのは良かった。

5日目—2月13日(水)

本日はロンドンからの移動日で、目的地はディバイジーズのベアーホテル。道中、ストーンヘンジに立ち寄り、一連の遺産群を見学した。風が強く、体感温度が下がるくらいに冷たかったが、去年のように大雨ではなかったため、十分に見学する時間が確保できて良かった。その後、ストーンサークルのあるエイヴベリーを訪問したが、当日は儀式やお祭りのない普通の日だったこともあり、ストーンヘンジと比べるとあっさりしてい

て、素っ気なく感じられた。訪問の順番は逆のほうが良いのかもしれない。

ディバイジーズ到着後、ウィルトシャー州博物館を見学したが、紅茶のおもてなしや閉館後のお土産店の営業といった館長の配慮があり、ありがたかった。この博物館の建物は、もともと複数であった建物をくりぬいて一つにしたものであり、段差が多く、移動も少し大変だったが、ストーンヘンジ前後の先史時代のみならず、古代や中世や近代の説明もしており、幅広い時代を学ぶことができた。その後、時間が遅くなったこともあり、予定を変更してパブでの夕食となったが、現地の人と会話する機会があり、イギリス人の生活の一端を知ることができたのは良かった。

6日目—2月14日(木)

イングリッシュブレックファストからサンドウィッチまで選べるようになったことで、ようやく朝食でも温食が食べられるようになる。今日はバースを訪問した。午前中はバース修道院に立ち寄った後、ローマンバスに向かう。バースの街に早めに到着したため、修道院はお土産店がまだ開店しておらず、ローマンバスはオープンとともに入場することになった。

ローマ式の浴場というと、日本では「テルマエ・ロマエ」の漫画が有名だが、ローマンバスの雰囲気がこの漫画作品の世界観に反映されているかのようで、とても興奮した。利用した音声ガイドが充実しており、施設が単なる浴場にとどまらず、宗教的な神殿、公共的なサロンとしての役割も兼ね備えた施設であったことがよく理解できた。ローマ時代の生活ぶりも把握できる説明が採用されているのは注目すべきだと思った。水路の一部を稼働させることで、浴場が機能する様子も分かりやすくなっているが、水質汚染の懸念から、入浴禁止になっているのはやや寂しい。だが、ハトが浴場で入浴の様子を見て、微笑ましい気持ちになった。

続いて、ランチ兼ティータイムをとる。ティーセットには紅茶以外にも中国茶やチャイなどもあってバラエティーの豊富さに驚きながら、皮付きペイクドポテトであるジャケットポテトを初めて食べてみた。ボリュームがかなりあったが、あっさり食べることができた。午後には、バース市街をガイドの先導で散策となり、ニコラス・ケイジの住んだザ・サーカスやジョージアン・ガーデンやロイヤルクレセントホテルのガーデンと色々な名所



ウィルトシャー博物館の豪華なストーンヘンジ模型



天気の良いので歩いてストーンヘンジへ

をまわった。せっかく風呂の町で有名なバースであり、入浴できるうえに街を見通すこともできる施設もあるとのことだったので、のんびり休憩するのも良かったのではないかと思った。ローマ式の入浴に興味があったし、何より毎日歩きでは負担が重い。ディバイジーズに戻った後、ホテルの周辺にある城や教会を散策し、トランプをして夕食をとった。

7日目—2月15日(金)

今日はディバイジーズからの移動日で、目的地はノリッチ。途中のスウィンドンで本日帰国する高岸先生と小田嶋さんと安食さんと別れた後、アプトンハウスに寄る。この屋敷は現在ではナショナルトラストが運営しているが、以前はシェルオイルの創業者であるサミュエル家の所有であり、彼らが集めたコレクションを庭や建物を含めた邸宅全体を利用した美術館の体裁をとっている。コレクションの一部はロンドンのテート美術館やパリのルーブル美術館にも貸し出されることもあるぐらいに由緒正しいものであり、当時の貴族社会の生活も知ることでできるほどの荘厳ぶりに圧倒された。コレクションには日本や中国由来の作品もあったが、その中に貝殻をあしらった作品があった。シェルオイルがもともと日本の貝殻の美しさに感動して貝殻細工を取り扱うようになったシェル商会に起源を持つことを考えると、感慨深いものを感じた。その後、ラグビーの発祥地であるラグビー校のあるラグビーを経由し、ノリッチに到着。現地では後半からの参加となるライアン先生が合流したが、山本さんとの顔合わせは明日になりそうだ。

8日目—2月16日(土)

ノリッチのホテルは朝食がコンチネンタルとイングリッシュに分かれていたが、イングリッシュのプランだったようで、すんなり食事に移行。昨日会えなかった山本さんとも、今日は無事に合流した。

午前中は、まずケスター遺跡に向かった。ローマ時代の街がイーストアングリア地方を支配していた女王ブーディカの反乱によって破壊されたため、現在では何も残っておらず、ところどころ険しい坂のある地形が城塞都市の名残を残すのみとなっている。AR技術を活用した専用アプリをスマートフォンで起動することによって、当時の町並みや道具を再現されて見ることができ、新しい史跡のプレゼンテーション方法として興味深かった。

次にイーストアングリア大学に移動して、セインズベリー視覚芸術センターを訪問。世界各地から収集した多様性に富んだコレクションを展示している場所である。中には日本由来のものも含まれ、ジャンから土偶の解説を求められたときには驚いてしまったが、皆で協力して理解できる説明をすることができた。

昼食後はイーストアングリア大学を散策したが、建物を継ぎ接ぎで増設したことによって、フロアが同じはずでも微妙に違っていたり、連絡通路が複雑になっていたりと、迷子になりそうだった。しかし、セインズベリー視覚芸術センターが鎌倉歴史交流館も設計したノーマン・フォスター氏の設計であったり(同センターは映画「アベンジャーズ」の中で司令部として

ロケ地にされていた)、学生寮が目を引きような前衛的なデザインになっていたりと、素晴らしい部分もあり、見学して楽しい場所でもあった。

その後ノリッチに戻ると、明日の予定が変わって夕食がセインズベリー研究所でのパーティーになったので、みんなで食材を調達することになったのだが、街中のアジアンショップでも日本食の材料はあまり売っておらず、思うようにはかどらず。海外で日本文化を示すことは難しいと、改めて実感した。

9日目—2月17日(日)

今日は予定変更が多い一日になった。すでに昨日の段階で夕食は変更されていたが、さらに当日になって、ヘイズバラ遺跡関連の訪問が取り止めになった。その結果、午前中は当初午後に予定されていたエイカーへ行くことになった。エイカーには、城と修道院のそれぞれ時代が異なる遺跡が近くにある。

最初に、エイカー城へ向かう。エイカー城はノルマン・コンクエスト後に作られたマナーハウスを改築して要塞化したものであり、何回か作り変えた痕跡や壁の一部が残るのみとなっていたが、高台の上にあつて、険しい坂も多い堅牢さを今に伝えていた。

次にエイカー修道院を訪れた。エイカー修道院はクリュニー修道院系列の修道院として存続していたものの、ヘンリー8世の宗教改革によって閉鎖されて、財産は没収、建物は取り壊しの憂き目に会い、現在では破壊を免れた一部を残すのみになっている。廃墟でありながら、往時の姿を伝えていく様子に独特な美しさを感じた。

昼食をとってウェルズ・ネクスト・ザ・シーを海岸線中心に散策した後、ノリッチへ戻り、セインズベリー研究所でパーティー。日本文化を示す例として日本から持ってきたせんべいが役に立ってよかった。

10日目—2月18日(月)

午前中、ノリッチ大聖堂をはじめとしたノリッチ市街を散策し、最後にノリッチ城に向かう。その後、セインズベリー研究所に戻って、昼食を取りながらレポート課題の作成を行った。思ったより時間がかかってしまったが、夕方まで自由時間となったので、午前中は駆け足で巡ることになったノリッチ城を改めて訪問し、ゆっくり見学させてもらった。散策して気づいたが、イギリスではどの都市もとにかく犬が多い。イギリスのことわざによると、子供に最適な友は犬とのことだが、老若男女を問わず、犬を連れている人が多く、犬好きの私にとっては癒やしであった。北海道犬や柴犬といった日本犬もいたが、近年の日本犬ブームが海外にも波及していることに驚いた。

11日目—2月19日(火)

今日はキングス・リンに行く日。キングス・リンは、もともとはノリッチの司祭が領有するビショップ・リンがヘンリー8世の宗教改革に合わせて今日の名称に変わった経緯を持つ街である。冬季オリンピックが開催されたこともあるカナダのバンクーバーの由来になったジョージ・バンクーバーの出生地でもあり、街には銅像もあった。セント・ニコラス寺院に立ち寄り、午前

4 受講者レポート ③

中はリン博物館のバックヤードツアーをキュレーターの案内を受けながら行い、近年発掘されたシーヘンジの概要をアクションやケーキ作りを通じて学ぶ。木製のシーヘンジが腐敗せずに海底に残っていたことは、奇跡と言っていいだろう。午後はシーヘンジが発見されたホルム・ネクスト・ザ・シーにあるホルムデューズナショナル自然保護区に向かったが、もともと自然保護区で道路も舗装されていないことから、長時間悪路を行軍した割には、遺跡がすでに移転されていて、現地には簡単な解説の入った看板以外には何も残っていない。海岸を眺めながら往時のシーヘンジの姿を想像することになった。

12日目—2月20日(水)

ビートリーにあるグレッセンホールを訪問。グレッセンホールは、様々な役割を兼ね備えた複合施設の先駆けというべき建物であったが、まずは作業所や邸宅としての役割に注目してみた。午前中はガイドの人、午後は現地のLGBTQ+クラブに所属する学生達に、ランチやティータイムを合間にはさみながら案内してもらう。双方とも説明があまり重ならないように配慮していたが、同じ場所であっても、違う観点から説明してくれたため、それぞれ新しい知見を得ることができた。

ツアーの合間には、別の施設に訪れる機会もあった。農場は、冬ということもあって牧場の役割しか考察することができなかったが、ノーフォーク州の特産品である馬以外にも、羊や牛や豚や鶏を飼育しており、牧畜や農業で使う器具も隣接する小屋での展示と合わせて、多様な牧畜の様子を実感できた。さらに隣接する森では、武器を使った狩りの模擬体験ができ、実際に試してみたが、弓や槍の予想以上の使いやすさにびっくりした。的に命中させている者もいた。

これらが終わると、グレッセンホールに隣接する博物館のバックヤードツアーを行ったが、マンモスを筆頭とした自然関連のモノと、産業革命以降の機械製品をはじめとした科学関連のモノを一度に保存している様子は、日本の国立科学博物館を彷彿させ、懐かしい気分になるとともに、日本での産業遺産の保護の遅れを痛感させられた。

ノリッチに戻ると、ドラゴンホールにて直木賞作家である中島京子さんの講演会に参加したが、時代や国による意識の違

いを考える良いきっかけになった。文学を専攻した者として、これからも考えていかねばならないテーマだろう。日本に戻ったら、中島さんのご著作を読んでみよう。

13日目—2月21日(木)

本日はプログラム最終日。長かったようで、あっという間に過ぎ去った二週間だったが、ついに今日で終わってしまう。プログラムの最後は、イギリス有数の名門校であるケンブリッジ大学への訪問である。由緒あるヨーロッパの大学に特有の街全体が大学になっている様相は、日本では見られない独特なものであり、とても新鮮に感じられた。午前中はフィッツウィリアムミュージアムをキュレーターの人と一緒に一巡し、その後、対岸にあるジャッジビジネススクールで解説を受けてから、同ミュージアムを再度見学した。ミュージアムでありながら、コレクションには美術品や工芸品も含まれていて美術館の要素も含まれており、日本にはあまり例のない複合的な博物館である。博物館と美術館が両立する実例として驚きの連続だった。その後、ランチも兼ねた自由時間となり、昼食をとりながらマーケットを含めた周辺を散策し、カフェの近くにあった動物学博物館に立ち寄り、古今東西の動物の化石や骨製を見学した。目玉の一つでもある歯クジラは21メートルもあって、カフェから見えるくらい巨大だった。他にもキリンやマンモスやサイといった大型動物の展示も多くあり、圧倒された。

午後にはケンブリッジ大学の先生と合流し、考古学の研究室を訪問して、スタッフから各専門分野の解説を受けながらカレッジを案内してもらった。それから、考古学・人類学博物館のバックヤードツアーとなった。普段ならいるという日本人スタッフがいないのは残念だったが、展示品のメンテナンス作業の様子を間近で見ることができたのは良い経験であった。

それからノリッチに戻り、セインズベリー研究所のスタッフと一緒に送別会を行い、二週間の思い出を振り返った。サイモン所長が来年度に東京大学で授業を行うことを知ったが、今年度を実施してほしかったと思うほどに先生との会話は楽しいものであった。その後、学生の有志でパブやディスコへ行き、プログラム最後の夜を楽しんだ。

(朽木亮太)



エイカー修道院にて



投槍器で狩猟体験

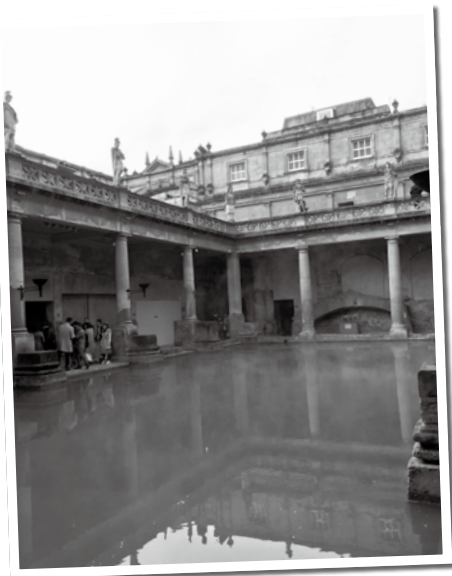
■ テーマ別レポート

夜久千華、朽木亮太、末本雄祐、築島愛美、高野改

1. 資料展示の在り方の考察：ローマン・バスと導線の美しさ

資料(遺跡、遺物等を意味する)展示における重要な要素として、「体験」と「情報」という対立項を仮定する。前者は、資料が実際に存在していた場所に在ることで、その用途や目的が五感を通して知覚できることを指す。草木柄の土器をみる時、産出地が砂漠ならば、水や植物の貴重さを感じるには現地に行くことが最も簡単な手段であることは言うまでもない。一方で後者は、量が評価の軸となる。土器一つでも、1個より10個あるほうがサンプルとして充実しており、時代や土地による分類が捗るという具合である。プログラムで訪れた場所のうち、「体験」の代表としてストーン・ヘンジ、「情報」の代表例として大英博物館が挙げられるが、併設する博物館とのアクセスが絶望的に悪かったり資料のみでは生活感を想像し難かったりと、資料展示において「体験」と「情報」の両立に非常に苦心しているという印象を受けた。ただ一つ、ローマン・バスを除いて。

ローマン・バスは遺跡を利用して博物館としているため、プロジェクション・マッピングや映像を駆使して資料そのものを五感で感じることができ、大英博物館やストーン・ヘンジの問題は解決される。さらに特筆すべきは「導線の美しさ」である。最初に現在の浴場の様子を2階から俯瞰させた後、遺跡の立体復元模型で当時の姿とリンクさせる。続いて、死生観を通じて当時の人々の一生を描き、信仰の在り方からその一生における公衆浴場の役割へフォーカスする。最後に到着した1階の浴場部分では、順路を敢えてなくし、当時のローマの人々と同様に「次はサウナに行こうか、水風呂に行こうか」などと思案しながら遺跡を巡ることができる。すなわち、遺跡の歴史やローマ史という抽象から、人々の一生、浴場の意義、実際の施設へと、段階を踏んで具体へと焦点を絞っていくことで、当時の生活へと自然にタイムスリップすることが可能なのだ。



ローマン・バス遺跡大浴場からは、各設備の遺跡を巡ることができる

この、和歌の修辞技法を彷彿とさせるが如き展示の流れの美しさは、他の遺跡や博物館の模範であり「体験」と「情報」の理想的な折衷と言えよう。

(末本雄祐)

2. 歴史的建造物・遺構と英国の関連

プログラムを通して英国の様々な歴史的建造物や遺構を実地に学習しましたが、その中で強く感じたものは現代英国の街並みと土地の歴史の強いつながりでした。たとえばバースにはギリシャ・ローマ風の正面を持つ黄みがかった建築が立ち並び、ロンドンでは同様の意匠の白い建築が印象的に視界に入ります。一方でノリッチでは燧石をふんだんに用いた黒い壁の建築がいたるところで見られます。それぞれの街並みが街と土地の辿った歴史を強く反映しており、今なお生きる街からそれを知ることができるのです。古典建築に強い影響を受けたJohn Wood父子主導の街づくりと、近隣で産出する加工しやすいバース石が生んだバース。多くの建築を失った大火の後、古典建築に洗練された優美さを見出す若い建築家たちの活躍で再興したロンドン。どちらの都市にも共通する古典建築への憧憬に深くかかわる、ローマ帝国の遺跡を巡る教養旅行Grand Tourやイタリアで古典様式を再興したパツラー



ロンドンのピカデリーサーカス



バースでガイドの説明を受ける

4 受講者レポート ④

ディオ様式の存在。あるいは中世、レンガを作る技術の未発達と豊富な燧石の産出から生まれ、かつ当時の面影をよく残すことができたノリッチ。いずれも歴史が現代の街に残り、生活の場に生きていました。

日本において歴史は、建築としては社寺や宿場町等に比較的に細々と残る程度で、大都市の街並み規模でしかも人々の実生活の中に伝わる例は多くありません。そこには建材の違いや都市形態、歴史そのものの独自性など様々な理由が考えられるでしょう。しかし特にこれから目を向けるとき、現代に作られる建築群とそれらから成る街並みは、洋の東西問わず土地ごとの差異に乏しいうえあまり長寿命ではないように思われ、気にかかります。人が、長く土地に根差した街並みに包まれる体験に感銘を受けることをまさに実感したためです。妥協できない安全の担保と建築の長寿命化を両立させつつ、土地ごとの歴史を映した生きる街並みをどのように創出していくことができるか、建築学生として考える必要を強く感じるプログラムでした。

(高野改)

3. 歴史とつながる日常

今回のプログラムでは、町を歩きながらそこにある歴史的建造物について説明を受ける機会が何度かあった。どの町も古い建物が多く残っており、かつそれらのうちの多くが現在も使われている。そうした建物の中でも特にノリッチの大聖堂が印象に残っているので、そこを訪れて考えたこと、感じたことを簡単にまとめる。

ノリッチ大聖堂には二度行った。一度目にプログラムの参加者全員で訪れたときは、教会の壮麗な装飾に感銘を受けると同時に、観光地としてよく整備されているという印象を受けた。充実したキャプションに加え、土産物屋や教育施設があり、観光客も多くいたからだ。

最初の訪問だけでは少し物足りなかったもので、自由時間に一人で再び訪れたが、夕方で観光客が少なくなっていたこともあり、一度目とは少し違う場所であるかのように感じられた。そうした中、夕方の礼拝が始まる場所に遭遇した。突然放送が流れてきて何事かと思い、辺りを見回してみると、ちらほらと信徒席に座っている人がおり、それで礼拝の時間になったのだと気づいた。邪魔してはいけないと思いその時点で建物



多くの教会には美しいステンドグラスがはめられている

を出てしまったが、私の祖母と同年代に見える女性が一人で静かに祈っている姿が印象に残っている。

大聖堂のホームページを見ると、礼拝の時間は毎日数回設けられていることがわかる。私たちのような町の外から来る人々にとっては、ノリッチ大聖堂のような場所は、観光地の一つであり非日常の場である。一方、地元の人々、特に教会に属している人々や外部の人でもキリスト教徒である人々にとっては、単に歴史的価値のある建物であるのみならず、祈りという日常の習慣を実践する場でもある。私は実際に毎日の習慣としての祈りが行われている場面に出会い、大聖堂が観光地として賑わう一方で、その中ではそうした日常が営まれているということを知った。

また、私はこのような歴史遺産を見るとき、現在どう在るかよりも、その過去、歴史に目が行きがちだ。いわば博物館のガラスケースの中にある展示物を見るときと同じような感覚であるが、それは現在とは切り離された、過去の遺物として捉える見方であるように思う。しかし、大聖堂への二度目の訪問を通して、実際はそうではないのではないかと思うようになった。古い建物が現在も使われているとはいっても、その役割は当初とは異なっていることも多いが、ノリッチ大聖堂は、観光地化しつつも教会としての役割を失っておらず、その中では数百年前と同じように、人々が集まって祈るということながみ実践されている。歴史が現在と切り離されたものではなく、今ここで起こっていることとつながっている、といえるのではな



ノリッチ街中にある建物。壁には一面のフリントが使われている



ホルム・ネクスト・ザ・シーにて

いだろうか。

私が今回のプログラムに参加した動機のひとつとして、遺跡や歴史的建造物などが現地ではどのように見られ、位置付けられているか知りたい、ということがあった。ノリッチ大聖堂への訪問を通して感じたことは、その疑問へのひとつの答えとなる。歴史遺産の役割は過去で終わっているのではなく、現在へとつながっている。言葉にしてしまうと当たり前のようだが、このことに気づけたのは、私にとって非常に価値ある経験であった。これから他の場所を訪れる際にも、この点を心に留めておきたいと思う。

(築島愛美)

4. 日本の美術館の性格とは：日英のコレクションをめぐる状況を比較して

文学部冬期特別プログラムの2週間で、私達はイギリスの博物館や遺跡を巡り、美術史学、考古学、博物館学などのさまざまな角度から考える機会を得た。私は普段から美術館に足を運ぶ機会が多く、美術館について考えながら過ごすことが多かったように思う。そこで本稿では、今回訪れたイギリスの美術館から受けた印象をもとに、翻って日本の美術館の特徴について考察を述べたい。

イギリスの主な美術館をいくつか巡ったときに、コレクションの量の莫大さに圧倒されるとともに、展示形態のシンプルさにどこか拍子抜けしたのを覚えている。日英の美術館に関して、私はコレクションの量と、コレクションに対する姿勢が大きく異なっているのではないかと感じた。前者でいうと、例えばナショナル・ギャラリーでみられるような、数十もの部屋に絵画がびっしりと展示されている光景を日本ではあまり経験したことがない。欧米の美術館は膨大なコレクションを展示する常設展がメインである一方、日本の美術館は小規模な企画展が中心であることはしばしば指摘されるが、ナショナル・ギャラリーやテート・ブリテンの膨大な展示量を目の当たりにすると納得であった。しかし、コレクションの規模以上に、コレクションに対する姿勢も大きく異なっていると思う。前述し



ナショナルギャラリー

た二つの美術館では、ガイドブックに掲載されているような有名な作品が非常に「素朴に」飾られていたように感じた。他の作品に比べ厳重に保護されているというわけでもなければ、有名な作品が必ずしも部屋の動線の中心に置かれているわけでもない。またそうした作品は、他の美術館に貸し出す、修復に出される、といったことがない場合、常設展として常にそこに飾られている。一方、日本のコレクションは国宝、重要文化財などの区分が細くなされている。さらに「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要項」やそれに類する規則によって、作品が展示される環境や日数に細かな規則が設けられている。それゆえ有名な作品は厳重に保護されて展示される、展示形態として常設展より企画展が採用されやすいといったことがあるのだと思う。イギリスに比べ、日本はコレクションの保護を展示よりも優先させているのだろう。人手や資金の不足から、作品の修復にかかるコストを最小限にしたいという考えなのかもしれないし、作品の消耗を抑えて未来世代も作品を鑑賞できるようにという考えなのかもしれない。いずれにせよ、コレクションに対する方針が大きく異なっていることを、イギリスの美術館であけすけに展示されている名品の数々を見て感じた。

それでは、そうした状況の違いを考えた上で、日本の美術館はどのような性格をもっているのだろうか。私は、日本の美術展示は「気軽」に鑑賞でき、「一期一会」の体験を提供してくれるものだと思う。前述したように、日本の展覧会は企画展が中心であり、2~3時間でサクッと鑑賞できる展覧会がほ



多くの展示室があるナショナルギャラリー



展示室で課題に取り組む

4 受講者レポート ④

とんどである。巨大な常設展を持つヨーロッパの美術館に比べると鑑賞に要する時間が圧倒的に短く、気軽な気持ちで美術館に足を運ぶことができるだろう。また、国立新美術館や森美術館など、クレストハレ型の比較的新しい美術館が、動員数の多い企画展(2018年美術展覧会入場者数1位の森美術館「レアンドロ・エルリッヒ展:見ることのリアル」など)を開催しているのも、この風潮に拍車をかけているかもしれない。サントリー美術館などを例とする、商業施設の中に美術館を設置するという発想は、買い物のついでに気軽な気持ちで美術館に足を運ぶことをねらいとしている。展覧会の規模が比較的小規模であること(もちろん展覧会としての満足度は保ちつつ)はそのねらいに沿っているだろう。

しかし、この「気軽」さは問題も孕んでいるとも感じる。例えば、企画展メインの美術館は、日本に住んでいる人にとってはさまざまな展示に触れることのできる魅力的な場所かもしれないが、日本に来た観光客が訪れる場所としては魅力に欠けるかもしれない。ナショナル・ギャラリーのように、日本のコレクションを展覧したいと望む人はいるだろうし、日本の展覧会に来たのに、自国で見られる作品が企画展として展示されていてがっかりする人もいるのではないだろうか。こうした問題を抱えつつも美術展として満足度を高めるためには、展覧会そのものが「一期一会」の魅力をもつことが重要だと私は考える。具体的には、キュレーションによって作品の魅せ方を最大限に高めつつ、見せ方を常に変化させていくことが重要なのだと思う。同じ作品であっても、展示される文脈や展示される位置により作品の見え方は大きく異なる。欧米の常設展で展示されている作品が、日本の企画展ではその表情を変えているかもしれない。実際、日本の美術展ではこの「一期一会」の満足感を大切にしているように思う。企画展では、



ノリッチの夜景

大きなコンセプトをもとに章立てがなされ、文脈に沿って展示された作品を見ることができる。さらに前期・後期で展示替えが行われることもあり、展示自体が作り込まれている印象を受ける。キュレーターの手により構成された展覧会は、それ自体をひとつの作品として捉えることもできるだろう。また、イギリスの美術館に行くと、日本の美術展においては当然のようにもらえる出品リストがないことに気がついた。こうした小さなことも満足感に寄与すると思う。

もちろん、文脈に捉われずに作品そのものを鑑賞するという体験も大切で、展示については様々な考え方があると思う。しかし、企画展を中心とする美術館に気軽に足を運んでもらい、作品そのものに加えて一期一会のキュレーションを觀賞してもらおうこと。これが日本の美術館の目指している方向性なのではないかと感じた。

(夜久千華)



お別れ前にバスの前で

5 総括

四度目の交流の冬

文学部ウインター・プログラムも四度目を迎え、今回も無事終了することができた。人文社会系研究科・文学部は、英国セインズベリー日本藝術研究所との間で部局間協定を締結して、海外の学生と直接交流しながら国際交流の実体験を積む学部学生向けの特別教育プログラムを平成26年度から実施している。夏と冬の2回、それぞれ約2週間にわたるプログラムを日本とイギリスの地で実施している。本プログラムは、主として考古学・美術史・文化資源学等に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら国際交流の実を体得してもらうことを主眼としている。

夏は東大にヨーロッパを始めとする海外の学生5名を招き、東大全学から募集した学部学生5名とともに、前半の1週間は本郷キャンパスおよび周辺地域の博物館や美術館・史跡・文化遺産等の見学研修や座学等を行い、後半の1週間は北海道北見市にある風光明媚な研究科附属北海文化研究常呂実習施設に滞在して、遺跡の発掘体験、付属資料館を利用した博物館学実習、周辺の博物館見学等を通じた社会連携の経験などを積んでもらっている。参加学生たちは、文字通り寝食をともにしながら2週間の間、英語を通して濃密な経験を集中して体験している。

冬はイギリスに東大生5名を派遣して、前半1週間はロンドンおよびその近郊で、後半1週間はセインズベリー研究所があるイギリス南東部で活動を行っている。今年度は、2月9日から22日までの期間で実施し、前半(9日～15日)は、大英博物館、ナショナル・ギャラリー、ロンドン博物館等の博物館・美術館、ロンドン塔、ストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡、ミトラス神殿等の史跡およびロンドンやバースのような歴史的都市の見学を行った。博物館・美術館や史跡では、専門の学芸員による展示解説やバックヤードでの体験実習を取り入れた。後半(16日～22日)は、ノーフォーク州およびノリッチに場所を移し、アプトンハウス、ノリッチ城博物館、フィッツウィリアム美術館等の博物館・美術館、

グレート・ホスピタル、キャッスル・エイカー修道院跡、ケスター遺跡等の史跡見学だけではなく、セインズベリー研究所等での歴史遺産に関する講義やグレッセンホール・ファーム・アンド・ワークハウスでの考古学体験実習やセットフォード博物館ティーンエイジャー歴史クラブとの文化交流等を行った。また初めての試みとして、ケンブリッジ大学考古学研究室を訪問し、同大考古学・人類学博物館や動物学博物館の見学も行った。

単なる見学旅行ではなく、訪れた史跡や博物館等では学芸員・スタッフとの討論や、おりによく開催されていた講演会等のイベントへの参加等を通じて、英国における博物館・美術館の運営方法や展示ポリシー、歴史遺産の取り扱い等まで考える場を積極的に提供している。さらにプログラム参加者には、1月初めからの5週間にわたり、セインズベリー研究所が提供する事前のオンライン講座を受講することで、英国の考古学や歴史遺産等に関する事前の準備を整えてもらっている。

本プログラムは、2週間にわたり東大生と海外の学生が寝食をともにしながら、互いに啓発し合うことを目的としているが、その成果は十分果たせたものと考えている。プログラム終了近くになると、交流を通して互いの人生観を議論するまでになった学生も多い。これまで参加した東大生の大半は、プログラム終了後も参加した海外の学生との交流を続けていると聞く。プログラムの実施によって、参加学生たちのその後の視野の拡大にまちがいがなく大きく貢献していると自負している。

この交流プログラムも来年度で5年目となり、ひとつの区切りを迎えようとしている。2020年度からは内容を一新して、さらなる交流プログラムを実現すべく準備を開始したい。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・関係者の皆様に深謝いたします。

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

佐藤 宏之



(山上あかね撮影)

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



セインズベリー日本藝術研究所

ノーフォーク州ノリッチ



ロンドン ●

平成30年度
文学部冬期特別プログラム
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2019年5月21日

印刷 ヨシダ印刷株式会社





クレイ・ネクスト・ザ・シーの風景



夕暮れ時のノリッチ

東大文  SAINSBURY INSTITUTE
For the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>



ロイヤル・クレスト